

短

歌



「吉祥天」 坂本 信也

追憶

横浜市(元山武市民) 朝見 文江

昭和の日戦火を逃れ生き耐えて貴き命米寿迎える
夏休み子や孫来たりて山武町懐かしき日の思い出遙か
青春の学びの友は車椅子リレー選手の面影在りて
愛着の亡夫の背広のポケットに我の出したるラブレター見る
在りし日の共に過したコーヒータム残るカップにふと手を添える
秋風の頬を撫で行く散歩路「元氣を出して」と野辺の花たち
亡き母の遺しし言葉今も尚老いたる身にも忘れ得るなし

邂逅

借毛本郷 秋庭 幸子

傍らに古き謂れの碑の残る思川桜の花房垂るる
楽しみに来たるつつじは萎みゐて金尾の山をさびしく降る
三つ峠近き里山に母衣付けし武者の如くに熊谷草咲く
時折に法師蟬啼く城跡の風に桜葉ひと葉ずつ散る
遠く来し塩船観音寺の静かなる紫の萩は咲き群れゐたり
秋晴れの八幡岬に上り来て果て無き蒼き海に見入りぬ
元日に津波避難警報の幾度も出でし輪島暮れゆく

ほととぎす

本須賀 川島 隆

公園の青葉若葉のひしめきてときをり聞ゆほととぎすの声
公園の板谷楓の並木道青葉若葉の光のシャワー
頂に泰山木の花ひとつ梅雨の晴れ間の陽に輝けり
公園の山桃の実の熟れ始むひとつ含めばなにか懐かし
夏祭り近付きをれば集落に垣刈る音の響き来るなり
海霧のひたひた寄せて集落も青田も空もみな朧なり
歌会にスマホ教室読書会句会と続き終活などは

卒業ですと

市原市(元富口) 村上 久江

戦死といふ死のよぎる意識で描きたりし自画像の八月また巡り来る
団欒に父は語りき「ゲートルを巻く速さ誰にも負けなかつた」
一心といふ懸命で真直ぐなるものに駆られて今日も歩めり
食すこともう卒業ですと箸つけぬ余命三年を締めくくる夫
歳重ねわれも名刺を持ち得たり青き文字にてわが名麗し
なんだ坂こんな坂と言ひながらまた上りゆく息はづませて
またひとつ楽しみ増やしコーラスの仲間と歌ふ頬紅くして

ウガンダの人

小松 齊藤 利治

ウガンダの人車外へと別れ行く黒きしなやか我が手に残し
冥土への通行手形今日もまた針の痛みを抱き透析
県都来て空中回廊踏み行けばコンビニのレジ異国の訛り
「五平どん」の大樟くすの陰ミンミンは鼻に掛りて六拍子なり
村装ふ若き妻等でありし日や菊江百合子も君江加代子も
甘酒の匂いの立ちて今夕は独居の家も宵祭なり
三十年そつと祝いて六月の浜辺に遊ぶ我と妻なり

私の短歌

高富 吉村 孝子

孫達と青空のもと墓まいり永久に続けと祈らせたまえ
連休はさぎ師も多いかせぎ時もう三回もそれらしき電話
寒がりの私つかまえみのむしと主人はいつもうれしげに云う
せまりくる老いの勢い早くとも私は負けぬ家族のために
古い十円洗っていると不思議です古代のにおいしてくるのです
まん丸お月様見ゆうれしくて明日からの「頑張り見てて」と
自販機でさがしまわりて見つからぬコンビニまで行きやつと手に入る

豊作みかん

木原 伊藤みや子

ユニホーム揃いのピンク慰問団琴の音色一段と冴ゆ
春浅く寝返り初めし曾孫のにこりはにかみ応援頻り
卒寿越え豊作蜜柑剥き馴れて生ジューズへと搾り振る舞う
トラクターを船に乗り変えゲットした大鮪こそ宴盛り上げて
透き通るワインの味見夜の秋亡夫の笑顔思い浮かべり
這い初めし嬰兒と目が合い抱き上げて頓珍漢の駄洒落言う
スマホ買う美辞麗句等なくて良い老いて若さの秘密持てそう

下総

日向台 立川目陽子

採られざる柑橘根かたにかたまつてひなたにまづしいひかり広がる
明けの地震なありたる空を予兆めくまだらにおほふ灰色の雲
わが父祖の姓おほき地に到着す榎の高垣つづく下総
四辻を右に曲がつて車窓より姉の指す門の「菅生」の表札
朔日餅 包装紙とけば三月の草の香りを餡がつつんで
梅散つてすき間だらけの樹となればさへづりわたる青空のこる
福岡に梅みてゐると受信せり病はあなたを寡黙にはしない

リハビリテーション病院にて

大網白里市(成東短歌会)

深川 義弘

リハビリの理学療法士はボール手に取りわれに足蹴を命ず
えんぴつを握る右手はこわばりて紙なぞる先ふるへて遊ぶ
ゆがむ右肩胛骨の矯正に右手かざして院内歩く
病院の三度の食事は待ち遠し制限食もカレーは旨し
運転のシミュレーションにアクセルを踏み込み過ぎて画面が消える
CTの検査結果は脳内の出血の影消えて安堵す
突然の脳出血に見舞われて思ひもかけず生活停まる

「しんせい」の香り

成東 高浦なみ子

ひそやかに「しんせい」の香の残りたる五十年経し父の袷に
待ちかねし夢の一日は疾く過ぎて旅の終わりの終電車待つ
日盛りの茶毘を待つ間の中庭に義母愛でしとう鬼蜻蛉飛ぶ
高張に今灯が入り二番町の山車動きゆく百年ぶりに
大多喜の森に眩しき陽の射してウオークラリーの子ら弾みゆく
子を抱く子安地藏の豊かなる頬に触れみて熱き息吐く
雪解けの速き流れの川べりに化粧柳は新芽吹ききたり

ジョウビタキ

本柏 竹之内幸子

冬の朝畑に下りた小鳥来てスマホ検索ジョウビタキよ
知らぬ間に畑に下りて我の傍カタカタと鳴くジョウビタキよ
薄茶色羽根の白紋ジョウビタキさーと目の前虫を探して
今朝も来ぬ我が目の前にジョウビタキ我を慰め誰かの化身
冬の間風の如くよジョウビタキ弥生の空にいつくかに去る
教え子の還暦祝に煎餅のハッピーバースデイ笑顔添えて
パリ五輪メダルへの道険し汗と涙の日章旗舞う

公孫樹

本須賀 今関 恵子

畑に増えし蒲公英の花その苞は皆反り返り西洋種のみ
オレンジのはなびら五枚紅の芯ハイビスカスはまこと華やか
添削の二重丸にし笑みこぼれ小学時代思ひいでらる
美術館の高きガラスの窓通し木々の緑の深まりを見つ
新美術展の「時委ね」なる百号の油彩を前に佇みてをり
「時委ね」のその緻密さと重厚感友の風格思ひてゐたり
外苑の並木の公孫樹勢ひて猛暑の天を突くがにつづく

後期高齢者

白幡 渡辺 幸子

門口の段差に足を踏み外しダイブすること路上に倒る
新しき保険証届き杳然とす「後期高齢者」の五つの文字に
突然に痛み出したる膝抱へ七十五歳の体と向き合ふ
体にも維持と管理が必要かアクティブ体操吾も参加す
心して転倒防止体操に励み介護の予防に繋ぐ

「後期」とふ言葉受け容れ自己管理己の足で歩いて行かん
高齢化に課題残るも言ひたきに「団塊世代」頑張りました

おぼろ月

沖渡（沖渡短歌会） 富谷 治代

月灯り影をうつして静けさの遠き日を恋うマロニエの径
久々に筆持ちつづる詩の世界気持ちしずむる夜の更けゆき
杉木立青葉の茂り木洩れ日の切り株腰かけ遠き日を恋う
畑中の雑草にまじり露草のひとときわ美し取るをためらう
心打つ言魂のカレンダーみるにつけ灯りをとす道しるべかな
手作りのうちわに短歌したためるひさびさに筆持ちなつかしきかな
春の夜の菜花をてらす月灯りおぼろにゆるる風のさやけし

われもこう

沖渡（沖渡短歌会） 富谷ひろみ

萩花のみだれ咲く庭秋匂うわれもこう寄り添い風情ふかめる
秋深む夕月にかかりしうす雲の見えかくれる窓辺のポエム
あぶらぜみ日もすがら啼く真夏日の風鈴の音に昼寝のいこい
台風の子報に準備せしものの思いの他に我が里さける
ワレモコウ月夜の庭にひらき初め秋を匂わす風物詩かな
友とみる趣味分ち合う秋の日の風鈴の音もいつしか細く
深みゆく夕月かかりて秋ふかむ虫の音きこゆ庭先の夜

自然

日向台（沖渡短歌会） 須賀 華子

疲れはて些細なことの連続に高熱を出し朦朧^{もうろう}となりぬ
おとなしく寝ていなさいよとて入院天井ばかり見て過ごしたり
今までの私は何処にいったのか体動かず信じられない
クレジットカード紛失手続きを自分でできず情なきかな
落ちついて人の話を良く聞いて正しい対応すればできます
雨あがり電車の窓から外を見るいつもの景色自然そのもの
忙しい日常生活くたびれて何事もない自然に戻る

オリンピック

日向台（沖渡短歌会）

コスモス

咲いた咲いた朝顔の青つるのばし毎朝咲くのを楽しみにしてた
煮こごりにどうぞと煮汁おみやげの心遣いを感じたる店
朝顔が一日一日つるのばし花が咲くのが楽しみな朝
オリンピック日本の松山ゴルフで銅深夜の応援眠れぬ夜よ
友とランチカレーにナス焼きピーマンと人參炒めトッピングして
足が痛い年甲斐もなく毎日をスポーツセンターへ頑張り過ぎか
九州は暴風雨で大変だ避難指示もでた夜の雨の中

ありがたきかな

東金市（沖渡短歌会）

釜石 文男

娘とのいざこざカット頭きてテーブルの上に皿が置かれる
大人げない身勝手な怒り情けなしまだまだ足りぬ人間修業
どうすべし謝り方がわからない小心者の父親オヤジの頭
疲れてる三女むすめに声をかけられず脇目でそつとのぞき見る我
そつとしておいてくれてありがとう娘は我になにげにポツリ
おもむろにわかつてくれてありがとう娘言いいしが我は聴きしのみ
父の日に娘のお金で食事するありがたきかなありがたきかな

冬の海

東金市（沖渡短歌会）

雄泉

浜千鳥ともに遊べや九十九里朝の初めの砂の絨毯
凜として水の波紋に湯気が立ち凍てつく浜に朝日眩しき
日の出過ぎ浜に多くの人影は潮引くように今は消え去る
独り占めせんと浜を歩き行く九十九里浜砂ははて無し
湧き出ずる願いを胸に初日の出朱く燃ゆる荒波の海
それぞれの思い出海に目を向ける元日の朝は口数少なし
薄皮を剥がすかのように冬の海さざ浪淡し白くなりゆく

「旅」のうた

成東 渡辺美佐夫

後鳥羽院の哀史を語る島人の額に光る汗のしたたる
今は昔春の花咲く洲の崎の海を眺めて別れし日のあり
四月から小学生の男の子俺は俺をと男言葉に
一人旅降り立つ駅は雪の中寺も近いか除夜の鐘聞く
あんな体でよく出るなあと言われた日家につけば大き虹立つ
にぎやかに家路を急ぐ小学生三内丸山夕闇せまる
家毎に「みかん」の幟安房の村「食べて行きんさい」と房州訛